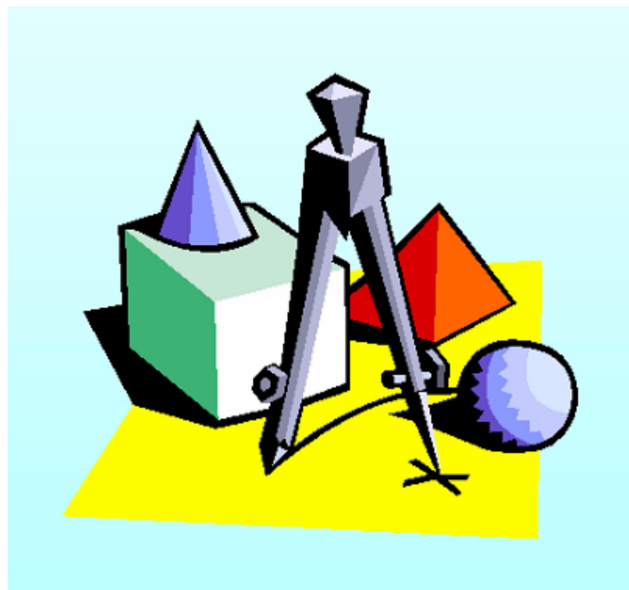


交点 $0 =$ アルファ A オメガ Ω である



真理子

初めに言ことばがあつた。言は神と共にあつた。言は神であつた。この言は初めに神と共にあつた。すべてのものは、これによつてできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。

ヨハネ福音書第1章1節〜3

この御使は、わたしを御霊に感じたまふ、大きな高い山に連れて行き、聖都エルサレムが、神の栄光のうちに、神のみもとを出て天から下つて来るのを見せてくれた。

ヨハネの黙示録第21章10節

わたしは、アルパでありオメガである。初めであり終りである。かわいている者には、いのちの水の泉から価なしに飲ませよう。

ヨハネの黙示録21章6節

「『あなたの尊敬する人は誰ですか』と問われたら、『アインシュタインです』と応えようと決めた。そう決めたのに、誰からも問われたことがなく、応えたこともないまま、およそ三年が過ぎ、『アリストテレスのほうがいいか……』などと、私の心は揺れている」

と、ここまで書いたところで、左隣の三人連れの男性客に声をかけられた。

「一人なの？ 何してんの？」

「小説書いてんの」

真理子はそう応えておいた。

平成八（一九九六）年七月一九日の池袋の居酒屋でのことである。

物理数学のことになるとしゃべりだすのが一人（理数男）、哲学の話になるとしゃべりだすのが一人（哲学男）、もう一人は図面を引くと言っていた（図面男）。「所沢 航空工学」と言っていたが、この三人は、どんな会社の人間なのか、それ以上の詮索は止めておいた。

いずれにせよ飲むにつれ、話の分る人間と見て、真理子はこう切り出した。

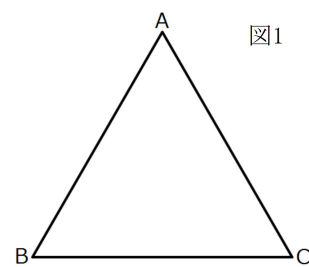
「アンタたち、私のことをどう思っているのか知らないけど、私は大変な人なのよ」

「大変な人？」

「そう。こうやって見ると、大変そうには

見えないかもしれないが、大変な人なの。どう大変かと言うと……、それはそのうち分かる。ところでア

図1



ンタたち、一十一が一だってこと知ってる？」

「なに、それ」

と言う彼ら。酒の

勢いで調子づいた真理子は、彼らの前に

ノートを広げ、正三

角形 ABC （図1）

を描き、しゃべりにしゃべりまくった。

「三角形 ABC の辺 AB と AC を、中点 D ・ F でポキンと折って、辺 BC の中点 E に持ってくる。言う

までもなく、辺 AB ・

AC の長さと、 DB

$+ DE \cdot FE + FC$

の長さは同じである

（図2）。同様に三

角形 $DBE \cdot FEC$

の辺 $DB \cdot DE \cdot F$

$E \cdot FC$ をそれぞれ

図2

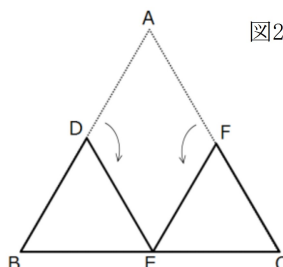
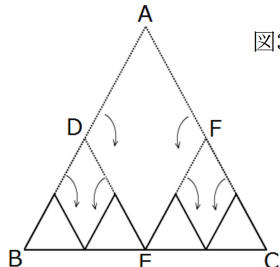


図3



の中点でポキンと折って、底辺 $BE \cdot EC$ の中点に持ってくる。言うまでもなく、新たにできた四つの三角形の二辺の長さは、辺 $DB \cdot DE \cdot FE \cdot FC$ と同じである（図3）。これを何度

も繰り返すと、最終的に三角形

ABC の辺 $AB \cdot AC$ は底辺 BC の中に溶

け込んでしまうから、正三角形の二辺の和は、一辺の長さに等しい。よって、『一十

一は一』が成立する（図4）。が、これは

我々の目に一本に見えるだけで、本当は一

本ではないかもしれない。

でも、高校の時の地学の先生は、チョー

クで黒板に大きな円を描いて、

『これは地球です。こう言うと、高い山があつたり、深い海溝があつたり、地球はデコボコしているじゃないかと思われるかもしれないませんが、地球の大きさに比べれば、そんなデコボコなんか、チョークで引いた

一本の線の中に含ま

れてしまうんです。

だから私たちが地球

上で地球を描くとき

は、余計なことを考

えずに、丸い円を描

いてればいいんです」っ

図5

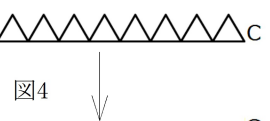
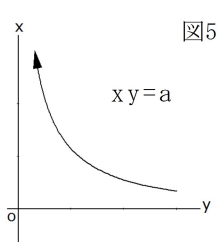


図4

て言っていたから、やっぱり一本に見えれば一本でいいんじゃないかと思ったの。でも中学の時の数学の先生は、 x が1のとき y が1、 x が2のとき y が2分の1、 x が3のとき y が3分の1。 $xy \parallel a$ 。チョークで黒板に反比例のグラフを描いて(図5)、『こうやって見ると、交わってるように見えるけど、宇宙のずっと先まで行っても交わらないのよ』と言っていたから、交わっているように見えるけど、交わらないが成立するなら、一本に見えるけど、一本ではないも成立するんじゃないかと思えてきたの。なんだか暗礁に乗り上げたような気がするけど、私はくじけなかった。宇宙とはどのようなものかを考えてみることにしたんだ。『宇宙のずっと先まで行っても交わらない』。果たしてこれは本当だろうか、と。

まず宇宙が、アインシュタインの言うように、『有限であって境界がなく、円い地球の表面を歩くように、真っ直ぐ進めば元に戻るもの』ならば(「相対論のABC」福島肇著・講談社ブルーバックス)、反比例のグラフは、

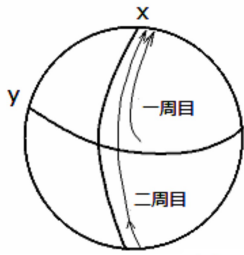


図6

空間を無限に分割しながら、宇宙をグルグル回ることになり(図6)、宇宙のずっと先まで行っても交わらないが成立してしまふ。これでは駄目だ。

次に私は、宇宙は膨張していると言うのだから、宇宙がどのように膨張しているかを考えることにした。

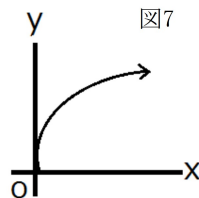


図7

まず宇宙が、図7のように、点Oを起点に、矢印の方向に膨張しているのなら、なんだか話にならない。これも駄目だ。

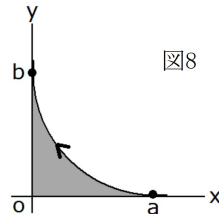


図8

次に私は試しに x 線上に点 a を置いてみて、宇宙は図8のように膨張しているんじゃないかと考えた。これが決め手になった。そして膨張している宇宙をさかのぼれば、ビッグバンにたどり着く。図8の x 軸上の点 a がビッグバン。これを起点に宇宙は始まり、矢印のように膨張し、 y 軸上の点 b で消滅する。図8の■部分が宇宙・空間のすべてで、点 a には、点 a から点 b までの■部分がすべて含まれる。同様に点 b にも、点 a から点 b までの■部分がすべて含まれる。当然のことながら、点

a も点 b も質量無限大である。

ところで、図8の■部分が宇宙・空間のすべてなら、点 b より先はないことになる。ない話をしてはいけない。ない話をするのは机上の空論。宇宙・空間そのものが点 b で終わっていて、その先はないのだから、『宇宙のずっと先まで行っても交わらない』は成立しない。必ず交わる。したがって、この数学の上に構築されたものは、すべて崩壊するだろう。バブルだからね」

と、ここまで一気に真理子がしゃべったところで、理数男が合いの手を入れた。

「そうですね。ボクもそう思います」
するとこんどは図面男が横から口をはさんだ。

「そんなことないよ。人間は宇宙にまでロケット飛ばしてんだからさ」

「違う。数学と言ってもいろいろあるの。私が崩したのは $xy \parallel a$ 、この数学だけ。それに、たとえば縦が1のとき横が60、縦が2のとき横が30……、面積 60×60 の長方形の縦と横の長さの関係。この手の問題なら、この数学で解けることを私は否定しないもの。宇宙のずっと先なんて言うなっこと。ところで、この数学の上に構築されたものって、あるでしょうか？」

「さあ、どうだろう……」

「ブルーバックスの超ひも理論の本のカバーのところに、『これまで点や線は、位置を示すだけで質量はないと思われてきたが、点や線に質量があるとするならば、空間が無限に分割できるという、これまでの数学を見直さなくてはならないのではないか』というようなことが書いてありました。空間の無限分割って、この数学のことですね？」

「そうです」

「私にしてみれば、超ひも理論を持ち出すまでもなく、ビックバン宇宙説が出た段階で、見直されてしかるべきなんです。ビックバン宇宙説って、仮説じゃないんでしょう？ 認められてるんでしょう？」

「認められています」

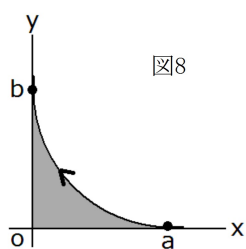
「一方で宇宙空間は点bまでだと言いながら、もう一方で点bから先の話を平気で行っている。私にはこの世間が理解できない。実はね、三角形の一十一は一を言ったのは

私じゃないんです。まったくの

別人（注…ゼロ学開祖御射山宇彦氏）なの。でも、ビックバン

宇宙説とからめて、 $xy||a$ のグラフを机上の空論と言ったのは私です。他の誰でもないんだからね。アンタたち、覚えてお

図8



いちようだいよ」

と、真理子は彼らに念を押す。

彼らは図8を見ながら口々に、「こんなこと考えたこともない」だの「これは大きい」だの「これは哲学だ」だのと言いつつには理数男が、こう言った。

「ボク、これは正しいと思う。でも、これが認められるのは難しいと思う。学者たちの大きく激しい抵抗に遭うだろうと。どうしてだか分かりますか？」

「生活、でしょ？」

「ええそうです。生活がかかっていますからね、彼らは抵抗してきますよ。でも事実とは動かないから、いつか必ず認められるとも思う」

「ソクラテスも殺されているし、ガリレオだって死ぬ目に遭っている。そういう意味でしょ？」

と、真理子が聞けば、

「はい、そうです」

「本当の事を言うと、迫害されるの。いづこも同じよ」

フーッと、真理子はここで一息入れ、大根サラダをつまみ、ビールを飲み、またしゃべりだした。

「で、これってさ、ひよっとす

ると教科書、書き直してこと？」

「そうですね。そういうことになりますね」

「やったー！ 教科書書き直しだつてさ。私は、こういう話が大好きなんだ。学校の勉強なんかしなくて良かったよ。結局、私書き直すことになるんだもん。『良い子の皆さん、お勉強は新しい教科書で正しいことを学びましょうね。いまオネエサンが、新しい教科書を作っている。出来るのにもう少し時間がかかるから、それまで外でドッジボールでもして遊んでなさい』ってことだよ。」

ねっねっ、さっき私が言ったこと、本当だったでしょ？」

「さっき言ったことって？」

「私は大変な人なんだって言ったでしょ？」

「本当だあ。大変だあ」

「インディアン嘘つかない、アワワワワってなもんよ。ところで、図8の点aと点bはいつか。いつ交わるかという問題を解きたいんだけど、この問題、解けると思う？」

「うーん、これは数学ではないから、解けないと思う」

「でもそれは、いまの数学では、という意味でしょ？ この問題を解くために、新しい手法を確立したら？ ニュートンのように……」

「なんで、こんなところにニュートンが出てくるんだよ！」

また図面男が横から叫んだ。

「ニュートンなのよ！」

と、真理子が一喝。

これに理数男が続いた。

「そう、ニュートンな

んです。いまの数学は、

デカルトとニュートン

の応用でしかないから。

ええ、新しい手法を確

立すれば解けると思っ

ます」

「でね、この絵(図8)

をずっと眺めていて、

あることがひらめいた。

ひよっとするとひよっ

として、点aと点bを

結ぶ曲線は、大きな円の

一部分なんじゃない

かって(図9)」

「いいぞ、いいぞ」

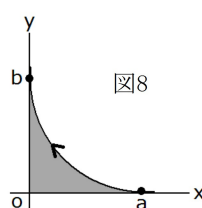
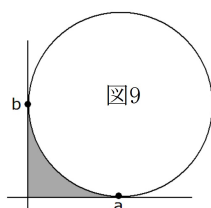
という感じ。

「だとすると、中学高校の数学で用は足り

るかも思っているんだ。実を言うとな、

私は学生時代に学校のお勉強をちっともし

ていないのよ。だから中学高校の数学がど



んなものだから分らないの。でも、分らない分らないといくら言っても分かるようにならないから、分かるためには始めるのが一番と思って始めて、ようやくと中学一年が終わって、これから中学二年に進むところなの。今日はこれを買うために池袋に出てきたんだ」

と、真理子はジュンク堂で買ったばかり

の「ハイトップ参考書中2数学」(旺文社)

をバッグから取り出し、彼らに見せた。

「ちよっと話は横道にそれるけど、いま、

学生時代に勉強していないから、中学高校

の数学がどんなものだから分らないって言っ

たよね。実は私、学校の教師に対して根深

い恨みがあるんだよね。私、数学できたの

よ。教えるのも上手かったし。で、『ちよっ

とやればできるのに、ちっともやらない』

と怒られていたんだけど、勉強しない子や

成績の悪い子と呼ばだしちや怒りなんてこ

とは、どの学校でもあるだろうから、あの

学校が普通の学校なら……」

「普通の学校って？」

「区立の中学とか都立の高校とか、要する

に普通の学校よ。でも私の出た学校は、キ

リスト教プロテスタント系の学校なの」

「ああ、そういう意味で」

「そう。勉強しない子や成績の悪い子を呼

びだしちや怒りなんてことは、どこにでもあることだから、あの学校が普通の学校なら、私はこうまで根深くは恨まないだろうと思う。でもあの学校はキリスト教の学校だから、職員室の先生方、みんなクリスチャンなわけ。なかには熱心なクリスチャンもいてさ。どう熱心かというと……ある時、こういうことがあった。朝、学校に行くと、教室内がザワザワして、聞いてると、靖国神社国営化法案が通りそうになったとき、反対派のデモがあつて、その様子が前の晩のテレビのニュースで流れて、あの学校の女教師が映ってたんだってさ。親と一緒にテレビを見ていたクラスの子が、テレビ画面を指さして、

『あーっ、渡辺玲子だ！』

って言ったら、その子の親が、

『お前、知ってんのかよ』

って言うから、

『知ってるなんてもんじゃないよ。うちの学校の先生だもん』

『なに!? 学校の先生? お前の学校、こ

んなのいるのかよ。これは大変だ。これは

人間の顔ではないよ』

って言っただって。戦争反対だけなら、

共産党あたりでも言いそうだけど、クリス

チャンっていうのは、信教の自由を守れが

あるから、凄まじいんだよね。私は番組を見ていないけど、授業中の様子から判断すれば、どんな顔だか見当がつく。鬼よ、鬼。それが一人ではなく、職員室の中に複数いるわけよ。靖国問題については、私には分からないから言及しない。私がここで強調したいのは、彼らの『熱心』さ。信教の自由を守れと、鬼のような顔をしてデモして歩くほど熱心なクリスチャンだったこと。で、問題はクリストなんだけれどもね、クリストって一元論者なんですよ。聖書難しい、クリスト難しいって言う人いるんだけど、それは二元論に洗脳されてるからで、一元論が分ればスカッと分るのよ。で、さっき、いまの数学はデカルトとニュートンの応用でしかないって言ってたけど、デカルトもニュートンも二元論なんですよ？」

「そうです」

「二元論っていうのは要するに、精神と肉体、形而上と形而下は別だったことよね」

「そうです」

「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」っていうクリストの言葉があつて、これを言うと、パンなしでは生きられないではないかって言う人いるんだけど、『まず神の国と神の義とを求めなさい。そうす

れば、すべて添えて与えられる』ともクリストは言ってるんだから、精神と肉体・形而上と形而下は一つのもの。要するにクリストは一元論者で、私のような人間も……」

「私のような人間って？」

「感性が鋭いとか文章が上手いとか、人から言われること多いんだけどさ」

「ああなるほど、そういう意味で」

「こういう私のような人間は、一元論を地でやってるのよ。で、学校ってのは、二元論を叩き込むところなんだよね。実はね、四月にもこの店で、東大工学部の先生方三人と隣り合わせて話し込んだ。その時に、なんだか私がかきわめて高度な内容のことをしゃべったみたいで、先生方が驚いて顔を見合せて、そのうちの一人が、

『俺たち、コツコツやってんだぞ』

って言ったたら、もう一人が、

『そんなんじゃないよ。感性の鋭い人間って、いるんだよ』

って言ってたのよ。これはどういうことかと言うと、東大理科には、学校のお勉強をしないと入れない。つまりデカルト・ニュートンの二元論をコツコツ勉強して東大理科に入って、ようやくとどろき着いたのが一元論ってことなのよ。どっちが上って言ったら、こっちのほうが上でさ。こっちに

てみれば、今頃そんなこと言ってるの、遅れてるうってなもんなのよ」

「そうです。デカルトもニュートンも古典です。いまの物理は、相対論と量子論しかないんですよ」

「だからよ、私が学校が嫌いなのは。私のような一元論者に二元論を教えようとしてるんだもん。うまくいくわけないわ。で、さっきも言ったけど、あの学校が普通の学校なら、私もこうまで言わない。私は、あの学校の職員室の教師を批判しているのではなく、あの学校の職員室のクリスチャンを批判しているんですよ。『この民は、口さきではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。人間のいましめを教えとして教え、無意味にわたしを拜んでいる』ってクリストが言っているんだけど、もね、これって、そっくりそのまま、あの学校の職員室のクリスチャンどもにも言えちゃうんだよね。クリストは一元論者。デカルト・ニュートンは二元論、人のいましめ。この二元論を自分でも信じ、子供たちにも教え、勉強しない成績の悪い子を呼びだしちや怒りしてる、この段階で、誰に弾圧されたからでもなく、自ら進んで信教の自由を放棄し、一元論者を潰しにかかっているってことなのよ。その一方で、信教の自

由を守れと、鬼のような顔をしてデモして歩いてるんだもん、メチャクチャよ。キリストは偉大である。『私はクリスチャンだ』って言う人間を、いくら見てもキリストは分からない。キリストが何を言っているのか知リたかったら、聖書を真っ直ぐに読むしかない。こんなことを理解するのに、何十年もかかっちゃったよ。

話を元に戻そう。ようやくと中学一年の数学が終わって、これから中学二年に進むところなんだけど、こんな調子で数Ⅲ・Cまでざっと流して、それで用が足りるならそれでいいし、足りなかったら、また考えようと思ってる。でもまあしかし……、点aと点bはいつか。いつ交わるか。こんな

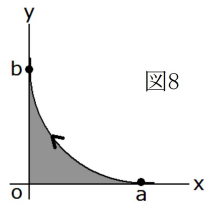


図8

問題、解いたって解かなくたって、どうでもいいんだよね。私の頭の中にある全体像のためには、必ず交わる、これさえ分かればいいんだから」

これを聞いて、こんどは哲学男と理数男が声を揃えて叫んだ。

「ぜんだいぞう!? これって、これだけじゃないの?」

「これだけ? まさかあ。これだけなんて、ひどいひどい。人をバカにして……」

「バカにして? それ、どういう意味よ?」

「だって、これだけってことは、これがすべてってことでしょ? こんなもん一つが私のすべてだなんて、ひどいじゃないの。どんな薄っぺらな本だって、百ページくらいあるのにさ、三角形の絵とグラフの説明じゃ、どう膨らましたって十ページくらいにしかならないもん。あとの九十ページどうすんのよ。いまの私の頭の中にあるのは、全体の六十パーセントくらいなもの。百パーセントにするには、読むもの読んで、考えること考えなきゃならない。こんな問題に時間つぶしている場合じゃないんじゃないかとも思ってる」

「だからさ、その全体像って何なのよ」

「そんなに知りたいのお?」

と、真理子は理数男ににじり寄る。理数男は、わずかに後ずさってこう言った。

「ボ、ボク、結婚してるから……」

これで全体像の話はチョン切れた。閉店十一時の店内に「蛍の光」が流れてきた。ちようど時間となったのである。

☆

あれから数年のうちに、真理子は思考を

進化させている。

点a・点bを結ぶ曲線が、大きな円の一部なら、この円は小さくすることもできるから、点aも点bも、最終的には交点Oの中に溶け込んでしまうのではないか(図9 ↓図10 ↓図11)。空間は無限に分割できないのだから、溶け込んでいるように見えるけど、いつまでもたっても溶け込まないは成立しない。必ず溶け込む。

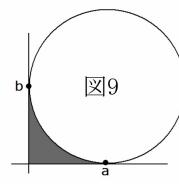


図9

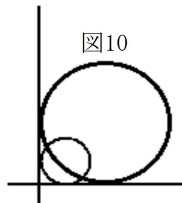


図10

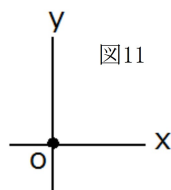


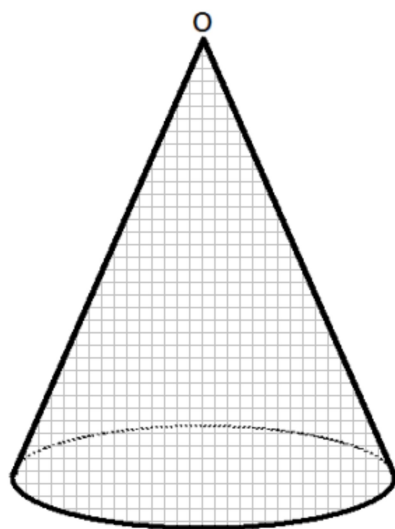
図11

☆

そのまた数年のうちに、真理子は更に思考を進化させている。これまでの図を、真理子は一ミリごとに縦横に線の引いてある方眼紙に描いてきた。が、これらの図を、縦糸横糸で織られた布に描けば、宇宙は糸でできていることになる。そして交点Oのところを指でつまんで引き上げれば、円錐

形になる。

宇宙は糸でできていて、かつ、円錐形である。真理子はこれを糸理論と名付けた。



☆ 著 者 後 記 ☆

この「交点 O = 私は A であり Ω である」は、これまで、日本文学学校合評会・文芸同人「土曜の会」合評会・ブログ・パブに、少しずつ手直ししながら発表してきたもので、今回の改訂を最後に、これ以上いじることはないと思います。

本文中に出てくるように、平成八（一九九六）年四月某日に、池袋の居酒屋で、たまたま隣り合わせた東大工学部の先生方三人と話し込みました。その際、なにかの拍子に私が先生方の琴線に触れるようなことを言ったらしく、

「お前はいいこと言うよな」

と言われ、

「いいこと？ 当たり前のことでしょ？」

と、私が言うのと、「どうして当たり前だと思ふのか」

と聞かれました。その際、私が極めて高度なことをしゃべったようです。ということは、人の心の琴線に触れるような言葉というものは、極めて高度なところから出てきていることになりますね。また先生方の口から「超能力（奇跡？）」という言葉が出てきました。で、キリストなんですが、キリストって、しばしば奇跡を起こしていますよね。キリストが、教会が言うような神の子かどうかは知りませんが、極めて高度な話の分かる感性の鋭い人であることは確かだろうと思います。そう考えないと、辻褄が合いません。

また先生方には、「いま何してんの？」（「どんな問題に取り組んでるの？」という意味）とも聞かれて、私は「易」と応え

ましたが、これ、事実と違います。平成八年四月当時は、ゼロ学開祖御射山宇彦氏と親交あった頃なので、ゼロ学（易）にも関心はありましたが、結局、「三角形の二辺の和は一辺の長さに等しい」「 $2+1=1$ 」も、自身のテーマ「初めと終わりは同じもの」にたどり着くまでの踏み台だったことになります。

御射山宇彦先生・池袋の居酒屋でたまたま隣り合わせた東大工学部の先生方・所沢航空工学の男性客……、私たちを引き合わせてくださった、大いなる力に感謝いたします。

（真理子）

令和二年十一月二十九日

わたしは、アルパでありオメガである。初めであり終わりである。かわいている者には、いのちの水の泉から価なしに飲ませよう。

ヨハネの黙示録21章6節